

大東市市制施行 70 周年

だいとう 70 冊の交差点

～わたしの大切な 1 冊～

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

今から70年前の1956年（昭和31年）、大阪府で22番目の市として大東市が誕生しました。

70年前というと、日本が国連に加盟し、アロハシャツとホッピングが流行り、高倉健と石原裕次郎が華々しく銀幕デビューした、そんな年です。70年の間に大東市は大きく発展をしました。その間、たくさんの方が大東市で生まれ、暮らし、出会い、離れ、そしてこの町を訪れています。

大東市立図書館では、70周年にちなんで大東市にゆかりのある70人のみなさまから、「心に残る思い出の本」や「人生で大切な一冊」「皆さまにおすすめしたい本」を紹介してもらいました。

今まで大東市にかかわってきた人が、どんな本を読み、どんな風に感じ、どのように影響を受けたのかを読んでもいただくことで、「人」と「本」とを通じて大東市の魅力をたくさん伝えられたら嬉しく思います。

※内容は概ね原文のとおりに記載しています。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

大東市長 逢坂伸子

1

「坂の上の雲」

司馬遼太郎

子どもの頃、我が家のお正月は、家族でこたつに入りながら司馬遼太郎の本の回し読みをする習慣となっていました。父が好きだったこともあり、家の本棚には司馬遼太郎の作品がたくさん並んでいました。その中でも『坂の上の雲』は、明治時代、日本が近代化していく様が秋山兄弟と正岡子規の成長と交差するように描かれていて、その時代感がとても好きな作品です。日本を強くするために諸外国の文明を学び、吸収し、急速に国が変革していく当時の様子が生き生きと伝わってきて、自分があの時代に生まれていたら、どんなことをしていただろうと胸が高まったことを覚えています。そして、私自身が大人になった今、あの時代の人々の国を思う心と努力に敬意を表するとともに、この作品に登場する人々だけでなく、先人に恥じぬよう、第6代大東市長として市民の命と暮らしを守り抜くため、大東を愛する心と努力を惜しまず市政を進めていきたいと思っています。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

野崎観音 福聚山 慈眼寺 杉山

2

「禅僧が教える心がラクになる生き方」

南直哉老師

多くの本と出会い、数えきれない感動や深い学び、そして広い視野を得て、今の私が形づくられてきました。

そんな数ある本の中から、野崎観音慈眼寺の曹洞宗禅僧として選ぶ「私の一冊」は、南直哉老師著『禅僧が教える心がラクになる生き方』です。

南老師は、私が福井県の本山・永平寺で修行していた頃、雲水の指導役を務めておられました。厳しい修行を終えて地元の寺に戻った私は、どこか負い、表情も硬くなっていたように思います。そんな折、ふと手に取った本に綴られていたのは、修行中に拝した厳格な老師の姿とは異なる、温かく実感のこもった言葉でした。「こうあるべき」という思いから解き放たれ、肩の力が抜け、本山での修行や学んだ事と、野崎観音での日々の行事が一本の線でつながった瞬間でした。

禅の教えを身近な言葉で伝えてくれる本書は、今も私の心を支えてくれ、僧侶として歩む原点を思い出させてくれます。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

EGO-WRAPPIN' 中納良恵

3

「海からの贈物」

アン・モロウ・リンドバーグ

私の大切な1冊は、アン・モロウ・リンドバーグの『海からの贈物』です。

彼女は、北大西洋横断飛行を初めて成功させた飛行機の発明家、チャールズ・リンドバーグの妻であり、5人の子供を持つ母でもあります。この本が書かれた1955年は、男性優位が今よりも根強く、女性が働き自由でいられることが厳しかった時代。子育て、仕事、社会、家庭の中で自身であることを見失わずにいたために、彼女は一人の時間を持つことの重要性を問い、数週間、一人で離島に暮らすことを決める。自然と向き合いながら、女性としての意味や理想や現実を、浜辺の貝と重ね合わせ綴られた、叙情的なエッセイです。

70年以上も前に書かれたにも関わらず、今もいつの時代も変わらず抱える孤独感や閉塞感というテーマ。その普遍的なテーマと、万物の成り立ちである貝殻の螺旋模様とを重ね合わせることで、私たちは壮大な宇宙の

微かな響きとして、繋がりを持って存在することを意識する。詩的でいて、その粹な表現が、どんどんと物語の中へ引き込み、深い魂の軸へと導いてくれるのです。

この本を知ったのは30代の初めですが、今でも色褪せず、行き詰まった時に読むと、心が洗い流されて行くような安らぎや充足感を得ることのできる、素晴らしい一冊です。本を読むということ。紙の匂い、めくるという動作は身体を静かに刺激し、思考し、想像し、言葉にはできない機微や、感受性を養える。

今インターネットが主流の情報社会。インターネットは、私たちが情報を扱っているように見えて、実は、扱われているような危うさを感じます。多くの情報に振り回される日常に、今静かに一つの物語へと没入し、集中し、内省できる時間がとても大切ですね。

読書は次元を越えることのできる精神性の高い旅です。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

大阪産業大学長 小川 和彦

4

「坊ちゃん」

夏目漱石

この作品は、私に読書の楽しさを教え、その後の読書の世界に浸るきっかけを作ってくれました。小学校5年生の頃に少し短縮した児童書で初めて読み、中学校2年生の頃に原作を読みました。登場人物の性格や行いは、現在にも通じます。明治時代の中学校が舞台であり、まじめでおとなしい教師であった「うらなり」君を遠くの中学校に無理やり転勤させた狡猾な教頭の「赤シャツ」を、「坊ちゃん」と豪放磊落な「山嵐」という教師と一緒に懲らしめる展開は非常に痛快です。そして、きっぱりと騒動の責任を取って中学校へ辞表を出します。この清廉潔白さが人間としての在り方を示しています。当時の長男優先の時代背景と、「坊ちゃん」の実家に仕えていて、無条件に大事に育ててくれた「清」という老女との関係は、今の時代にはほぼないと思いますが、この深い愛情を注ぐ彼女と一緒に暮らす場面に本当に救われます。そして、その期間が短いことに無常を感じます。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

お見送り芸人しんいち

5

「煙太郎」

芝 大輔

フリもオチもしっかりしていて、思いきり笑えるのに、どこかちょっと泣ける。

芝さんはホンマに天才なんだなあと、改めて実感した一冊です。

そして何より仲間思いで、めちやくちゃ「主人公」な人。

おそらく芸人をやっていたとしても、大成功して大金持ちになっていたんだろうかと、普段から関わっていて感じていましたが、たとえ面識がなかったとしても、この本を読めばきっとそう思ったはずです。

それと、写真がいちいちおしゃれで：そこだけちょっと鼻につきました。

芝さんの魅力がたっぷり詰まった『煙太郎』、ぜひみなさん読んでみてください！

ちなみに、実は僕も昨年『嫌われ者って金になる!』（徳間書店）という本を出しました。

僕の芸人人生を語り尽くした一冊になっています。

大東市のみなさん、よろしければぜひ手に取ってみてください！

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

共栄化成株式会社 松原 美奈

6

「ねこたちのてんごく」

シンシア・ライラント

昔、娘時代は小説を漁るように読んでいました。森瑤子や江國香織などです。残念ながら文庫本の字が読みづらくなり、小説からは遠ざかっていました。先日、西部図書館のイベントで空き時間に絵本を手にとったところ、動物が出てくる作品に惹かれ、思わず涙することもありました。その中から選んだのが『ねこたちのてんごく』です。わが家には猫が4匹いますが、数年前に最初に飼った猫との別れを経験しました。この絵本を読みながら、あの子も天の上で幸せにのびのび暮らしているのではないかと感じ、心が少し軽くなりました。猫を飼っている方には、ぜひ読んでいただきたい一冊です。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

大東・三好長慶会会長

河村共之

7

「おかあさん」

サトウ ハチロー

師に「マスコミの世界で寝起きしたい」と宣うと・・・だったら・・・と言
い渡された、3カ条①広く深く社会を観る事 ②常に若々しい情熱を滾ら
せている事 ③少なくとも1年に50冊以上の本を読む事。そして、これ
が私の人生の課題となった。

本もまた師である。人生の折々に出会う書は、自分が欲する時の書でも
ある。そこに良き邂逅が生まれる。

私は母子家庭で育ち、兄姉がいるものの母の苦労を常に見てきた。農家
で男勝りの仕事をこなすモノを余り言わない人であったが・・・女伊達らの
母の根性は、今でも数々の言葉と共に思い起こす。私も母を謳った詩を書
いた。思いは深い。

社会人としての生き様は『宮本武蔵』に学んだ。吉川英治さんの凄い迫
力は「武蔵」の生きさま・・・そのものであった。私もその一部を頂いた。

D・カーネギーの『人を動かす』も、その欲する時もの・・・

まさしく書は「師」である。

だいたい70冊の交差点

私の大切な一冊

株式会社アイネットケアサービス

白川初美

8

「ハチドリのひとしずく 今、私にできること」 辻信一

この物語は南アメリカの先住民に伝わる物語です。2015年、国連加盟193か国が合意したSDGsの17の目標が掲げられ、2030年までに達成を目指し、誰一人取り残さないことを原則とし世界中で取り組まれてきました。しかし残念ながら、地球温暖化による気候変動、自然災害、戦争、飢餓、格差問題等様々な大きな問題が地球上で起こっています。でももっと大きな問題は、これらの事に対して、自分に問題を解決する力なんて無い、まるで他人事のように大切な事柄や行いに目をつぶってしまうことです。私達一人一人は小さなハチドリの力に過ぎないかもしれませんが、「私にできること」について考え、行動し、それらを積み重ねてゆくことができるとしたら森の火を消す力になり豊かな未来に繋がると思っています。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

株式会社アクセスライフ 住川奈美

9

「母の待つ里」

浅田次郎

この本に登場する主人公は、社会的な地位も富も持ち、日々社会での合理的な判断、制度、組織の中に身をおいて暮らしている。そんな彼らが仕組まれた架空の故郷と解りながら、そこに身を置き、心からの涙を流す。

人は効率と正論の中だけでは、やはり生きていけない。数字では測れない関係性や感情の機微の重みを、この本は浮き彫りにしています。読み終えた時、なんとも言えない心の震えを感じます。亡き母への想い、過去に関わってきた人々への後悔。

私自身も、この母の待つ里が本当に存在するなら、今まで自身の歩んできた道を振り返り、自分が見失ってしまったものが何なのか探す旅に出たい。この架空の仕組まれた故郷に身を置き、涙を流す時間が唯一、本来の自分を取り戻す手段かもしれない。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

株式会社 三住建設 有田三千子

10

「お探し物は図書室まで」

青山美智子

「お探し物は図書室まで」は、人生の分かれ道で立ち止まった人たちが、ふらりと訪れた図書室で一冊の本と出会い、自分自身の中にある「本当の探し物」に気づいていく物語です。

無口で少し不思議な司書さんがすすめる本は、必ずしも悩みに直結しているわけではありません。それでも、本に添えられた小さな手作りマスコットと共に手渡されることで、登場人物たちは自分の心と静かに向き合い、答えを「与えられる」のではなく「見つけていきます」。

大きな成功や劇的な変化ではなく、ほんの一步を踏み出す勇気が、世界の見え方を変えてくれる。忙しい毎日の中で、自分の歩幅を取り戻したい人にそっと寄り添ってくれる一冊です。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

創作工房一志家具製作所 市川一志

11

「キッチン」

吉本ばなな

中学生の頃、母が「これ、読んでみたら」と差し出してきたのが『キッチン』だった。なぜあるときこの本を勧めてくれたのか、今になってもはっきりとはわからない。ただ、そのさりげない一言が、私と本との距離を大きく縮めた。ちょうどよい厚さのハードカバー、「キッチン」というやわらかな題名、そして「吉本ばなな」という印象的な名前。そのすべてが新鮮で、気づけば夢中でページをめくっていた。それまでほとんど本を読まなかった私が、本の世界に入り込む心地よさを初めて知った一冊。誰かの何気ない勧めひとつで、人生はこんなにも豊かになるのだと知った。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

もりねき書店 竹中雄一

12 「お探し物は図書室まで」 青山美智子

私の大切な一冊は、お探し物は図書室まで（青山美智子）です。

これまで私は長くビジネスの世界で働いてきたこともあり、読書といえば経営書やマーケティングなどのビジネス書が中心で、小説を読む機会はほとんどありませんでした。

まさに仕事の為に本を読んでいたのです。

そんな私が「もりねき書店」を立ち上げた頃、「書店をやるのだから小説も読んでおかない」と思い久しぶりに手に取った小説がこの一冊でした。

図書室を訪れる人たちが、司書のすすめる本をきっかけに、自分の悩みや人生と向き合い、少しだけ前に進んでいく。そんな温かい物語に触れながら、本には人の背中をそっと押してくれる力があるのだと感じました。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

大東書店

青木力

13

「東京バンドワゴン」

小路幸也

私は還暦の年に心臓のバイパス手術を受けまして、これまでの様な、日常の生活を送れるのか、入院中そればかり考えていました。そんな私に日常を取り戻してくれたのは、読書でした。

その中で東京バンドワゴンは大好きな本です。

昭和のホームドラマの様に、暖かな家族、義理と人情、たくさんの仲間たち。

この本には、私の求める日常があります。堀田家の勘一は作中では、現在89歳です。私も、もう少し頑張ります。年に1回、4月の新刊が今から楽しみです。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

文教堂 中尾

14 「みをつくし料理帖」

高田郁

高田郁さんの「みをつくし料理帖」は、それまで男性読者が中心だった時代小説というジャンルに、料理という新たな視点から息吹を吹き込んだ傑作です。

最大の魅力は、主人公の滯が「食は人の天なり」という信条を胸に、襲いかかる数々の困難を健気に乗り越えていく姿にあります。

また、離れ離れになった幼馴染の野江と「雲外蒼天」を信じて絆を繋ぎ続ける物語は、涙を誘わずにはられません。

描かれるのは単なる料理ではありません、その一皿が誰を救い、どう人の心結び、料理に込められた情愛の深さが、心に温かく響きます。読み終わると「ごちそうさまでした」と言いたくなるような美味しい料理を味わった感じになります。

高田郁先生の作品は「あきない世傳 金と銀」シリーズなどもありますのでぜひどうぞ。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

阪奈珈琲豆店 ふうじー店長 (A.Fujimura)

15

「東高野街道 生駒山西麓編」

杉山三記雄

子供が生まれたのをきっかけに大東市に引っ越してきて早15年。気が付けば、細々と自家焙煎珈琲豆店を営むようになり、山の麓で自ら焙煎した珈琲豆を自転車で配達し始めたのをきっかけに、大東市とその周辺の街々の魅力の源泉は「東高野街道」にあるのではないかと思に至る。

今ではロードバイクで東高野街道を駆け抜けるのが日課となり、この街道についてもっと知りたいと思うようになり、大東市史（近現代編）や高野街道の本を手取るようになった。

そんな時に出会ったのが「東高野街道 生駒山西麓編」という一冊の本。ISBNコードがあるので間違いなく本。しかしながら見た目は冊子。今でいうZINE。作者の熱量が伝わる手作り感のある本だった。

残念ながら、まだ大東市立図書館3館には所蔵されていない様だったが、大東市とその周辺の街々（四條畷・東大阪）の魅力がとても伝わる良書。一度手に取って改めてこの町の魅力を感じてほしい。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

中村崇明

16

「大東今と昔の写真集 Vol.1」 株式会社まちんぐ

この写真集は、大東市の昔の姿を伝える貴重な記録であると同時に、同じ場所を撮影した現代の写真もあわせて掲載されており、過去と現在を見比べながら街の変化を実感できる一冊です。

一見すると不思議に感じる行き止まりの道が、かつては橋のたもとだったことや、高い建物がほとんどなかった時代には京阪電車の線路が見えていたこと、さらに寝屋川では貸しボートが楽しまれていたことなど、今では想像しにくい風景が数多く紹介されています。写真と解説をきっかけに、昔を知る方から当時の話を聴く機会も生まれ、大東市が歩んできた約70年の歴史や人々の暮らしの変化を知ることができました。ページをめくると、この街への親しみや愛着が自然と深まっていく、ぜひ多くの方に手に取っていただきたい一冊です。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

黒猫堂

17

「82年生まれ、キム・ジヨン」

チヨ・ナムジュ

『82年生まれ、キム・ジヨン』と出会ったのは、大阪産業大学の市民講座で紹介されたことがきっかけでした。もともと女性の人権やジェンダー問題には関心があり、外国語大学でアジア地域の言語を学んでいたこともあって、韓国を舞台にした物語でありながら、日本社会にも通じる女性の生きづらさを強く感じながら読みました。幼い頃から抱いていた違和感や、就職、結婚、出産を経るなかで少しずつ積み重なっていった疑問が、一人の女性の人生を通して可視化されていくようで、とても印象に残りました。特別な誰かの話ではなく、社会の中で「ふつう」に生きる女性の姿として描かれているからこそ、自分自身の経験とも重なり、「個人的なことは政治的なこと」なのだと深く実感した一冊です。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

sakuraDD

18

「ノーマン・ロックウェル カバー画集」

クリストファー・フィンチ

私が絵の勉強をしていた学生時代に、もっとも好きなイラストレーター
のひとりがノーマン・ロックウェルです。洋書店で初めて彼の画集を見た
ときは感動しました。『サタデー・イブニング・ポスト誌』という雑誌の表
紙を飾るイラストなのに、油絵で描かれた丁寧な絵は、アメリカの日常生
活や家族、社会をとってもリアルに描かれています。彼の作品には、どのイ
ラストにも映画の一コマのように素晴らしい構図と物語性があり、その時
代の雰囲気や細部まで正確に描かれていることです。そのときの画集は輸
入本だったので、解説文は英語で意味はわかりませんでした。画集とし
て絵の勉強に活用させていただきました。それから何十年か経ち、最近、
日本語で出版された「ノーマン・ロックウェル カバー画集」を見つけま
した。イラストごとに日本語の解説文があるので、作品の背景を深く味わ
うことができました。今もアメリカを代表するイラストレーターです。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

南郷の里 宮中久美

19

「13歳からのシンプルな生き方哲学」

船井幸雄

この本とは、私が施設運営を任せればビジネス書を手当たり次第に読んでいた時期に、息子と行った子供向けの本棚で出会いました。読んでみると、私がチームで仕事をする上で大切にしたい事がとても分かりやすく書いてあったので、当時は会議や問題が起きる毎にコピーを持って参加したりと本当に活躍してくれました。今でも大事なところは、オリエンテーション等で新人職員にも共有する様にしています。南郷の里を良くしたいと思うタイミングに、経営のプロである船井幸雄さんのこの本と出会えた事が、私たちにとって本当に運が良く、この一冊から南郷らしさが作られたと言っても過言では無いと思います。現在では、職員達の言葉の端々に大切にしている事が受け継がれている事を実感します。何より、優しく素直で明るい職員達がお互いの長所を尊重し合う事で、個性豊かな職員達と楽しく南郷らしい運営を行えています。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

森田 拓馬（大東市立歴史民俗資料館）

20

「お仕事は文化財 仕事場拝見インタビュー」 釘田寿一

日本の歴史や伝統文化が好きだったので、漠然と大学では歴史を勉強したいと考えていました。幸い歴史系の学科で大学に進学できたものの、将来の職業については全くイメージが出来ないままモラトリウムな大学生活を送っていました。そんな時期に出合ったのが「お仕事は文化財 仕事場拝見インタビュー」という書籍です。たまたま立ち寄った近所の本屋に積まれており、題名に惹かれて手に取ったのですが購入したその日に一気に読み終えてしまいました。文化財に関わる専門家や職人60人へのインタビュー記事をまとめたものですが、仕事のやりがいについて熱く語られていました。

卒業を迎える時に同級生の多くが発掘調査員を目指したり、大学院に進学して専門性を高める選択をする中で、私はこの本で紹介されていた「レプリカ作り」の道に進みました。その後いくつも仕事を変えながら現在に至りますが、間違いなく私の人生に大きな影響を与えた1冊です。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

やっちゃん

21

「ゆきとトナカイのうた」

ボデイル・ハグブリンク

とおい北の国でトナカイといっしょに暮らしている女の子のお話と、
綺麗な雪の景色や夜空の絵トナカイの群れテントの中での暮らしに魅入
りました。そりに乗って夜空をみたいと思いました。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

さつき

22

「野火」

大岡昇平

第二次大戦末期、フィリピン・ミンドロ島で、飢餓の中を生きのびた旧日本軍兵士の話です。極限状態に追いつめられた人間がどうなっていくのかを、告白体で描いています。題材のドロドロした暗さを、作者の明晰な知性がしっかり支え救ってくれていて、重厚な作品となっています。

今も世界のあちこちで戦争はやまず、拡大のおそれさえある時代、日本の忘れてはならない記憶を大切にするために、若い方々にもおすすめしたいと思います。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

和気清実

23

「生まれ出づる悩み」

有島武郎

青年は絵を学び描くために東京に出ていた。しかし、故郷北海道岩内で漁師をしていた父が死去、やむを得ず父の後を継ぐため青年は故郷に帰らざるをえなかった。

札幌の展示会で青年は一枚の絵に惹きつけられる。彼は自分のスケッチをもってその作者を訪れる。その作者は青年のスケッチを見て、ほとぼしる筆の勢い、適格な描写に驚嘆する。そこで、青年が語る生い立ち海の暮らしを自分の筆で描き出した「生まれ出づる悩み」である。作者は有島武郎。青年画家は木田金次郎。

僕は、北海道岩内を初めて訪れたのは1972年、画家の絵を探したが見つけれなかった。後年岩内駅のすぐ近くに白亜の立派な「木田金次郎美術館」が建てられた。館内には絶筆の「薔薇」はじめ岩内周辺の海や崖、海岸風景が並んでいる。それは『生まれ出づる悩み』の世界そのもののように僕には思えた。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

大阪産業大学総合図書館長 大槻伸吾

24

「天平の夢」

井上 靖

「天平の夢」は、唐の高僧を日本へ招くという使命を受け唐へ渡った日本の僧4名と鑑真を中心として物語が進む。鑑真の渡日は海況や社会情勢等に妨げられ困難を極める。半ばで亡くなる僧がでたり鑑真自身も失明したりするなどの度重なる苦難を乗り越え、ついに鑑真を日本へ迎えることを成しえたという事蹟をもとに書かれている。

学生時代に同級生が映画「天平の夢」を鑑賞し、自分は何者で何のために生きているのかという命題に迷い込むようになっていた。それを知り、鑑真が失明してもなお、何故仏教の戒律を伝えるために縁もゆかりも無かった日本へ渡ることに取り組んだのか、私もその真意を知りたくて「天平の夢」に興味を持った。

この物語に描かれた鑑真や日本の僧たちの高潔な想いや強い決意を、私自身は今も身に付けることはできていない。大きな時の流れの中で人間は元々小さな存在であることを気づかせてくれる一冊であった。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

檜垣一美

25

「新十津川物語」

川村たかし

今から37年程前、私は30代後半の専業主婦で、何かしらの生き甲斐を模索していた。折しも、大東市立図書館の司書さん主催の「大人のための子どもの本を読む会」で『新十津川物語』を紹介され、全10巻を読破。私は涙し、心を激しく揺さぶられた。

明治の頃、奈良県十津川村を襲った大豪雨で、家や土地を失った村民の大半が新天地を求めて北海道に移住。その史実に基づいた物語である。9歳の主人公フキが老齢を迎えるまで、想像を絶する逆境と試練に耐え生き抜く姿に、私の人生観は大きく変わった。そしてマイナス思考だった私は、自分を変えようと思い立ち、司書資格取得を目指した。大変だったが、「幸せな苦勞」と、プラス思考になっていく自分が嬉しかった。

その後、司書の仕事を得て、家事と両立。現在、すっかりポジティブになった私は、ボランティア活動に喜びを見つけている。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

安西美千代

26

「夜と霧」

ヴィクトール・E・フランクル

私は京橋行きの電車の中にいた。ラッシュアワーが終わって、車内はすいていた。乗客はスマホを片手に何に夢中になっているのだろうか。窓外の樹木は緑に膨らみ、川は緩やかに流れている。平和な日常だ。しかし、この電車が、このままアウシュビッツ駅に着いたとしたら、この電車の同乗者たちは皆、生きてはいないだろう。戦慄した。

夕べ、再読した「夜と霧」の書物の中の凄惨な収容所生活が蘇った。作者は著名な精神学者である。ある日、霧に包まれた夜陰にまぎれ、家族ともどもナチス親衛隊に連行された。彼はユダヤ人だった。何日も貨車に乗せられ着いたところがアウシュビッツ駅だったのだ。それからの過酷な収容所生活が細かく記されている。

例えば「カポー」について、彼らは同じ被収容者であった。腕力があり、サディスティックな人間がカポーとして、他の被収容者たちを痛めつけるのだ。その行為は監視兵よりきびしかった。

わずかなパンと水のようなスूपで、被收容者たちは何キロも歩かれ、カチカチに凍った表土を掘り、排水管の埋設をしたり、切り立った断崖で日に何時間もトロツコの上を開けるなど、作業は過酷をきわめた。しかしそんな中でも、些細な恐怖を免れるときは運命に感謝するのだった。やがて作者は発疹チフス收容所に医師として配属される。医師であっても死に直面する中で薬はわずかなアスピリン、全員に行きわたる量もない。重篤であるか危篤であるか選別して、危篤状態の患者には薬をやることのできないのである。

こんな過酷な日々の中でもなお人間として、尊厳を守って生きることへの希望、別れ別れに收容されている家族への思いが唯一生き残れる力となるのだと作者は言う。不確かな世界情勢の2026年の今、70年の時を経たこの作品が語りかける言葉のひとつひとつを読んでほしいと切実に願います。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

中道佳昭

27

「海賊モア船長の遍歴」

多島 斗志之

髑髏旗をなびかせ大洋を疾走し、獲物の商船に乗り移り財宝を掠奪する海のギャング、海賊は宝島、ピーターパン、ワンピース、パイレーツオブカリビアンなどフィクションの世界だけでなく、歴史上実在していた。

大航海時代、スペインはインカ帝国を滅ぼし、ボリビアのポトシ銀山から先住民を酷使して莫大な量の銀を採掘した。これがヨーロッパに流入し銀価格が暴落。英国王室は財政破綻に直面。そこでエリザベス一世は海賊によるスペイン財貨の略奪を国策とした。すなわち1／5税。かのキャプテンドレイクは略奪をしながら世界一周、王室に莫大な財貨を献上。その後幾多の海賊船が洋上に横行する。財政安定後英国は掃討作戦にチェンジする。

本書の物語はその時代背景の中で資料、事実に基づいて話を進めている。そこには海賊達のリアルな生き様を見ながら彼らと伴に船に乗って大洋を冒険する旅へと我々を誘ってくれる。

だいたい70冊の交差点

私の大切な一冊

船木弘光

28

「日はまた昇る」

アーネスト・ヘミングウェイ

人類未曾有の殺戮の大惨事となった第一次世界大戦の戦場の惨禍を経験した若者が、戦後パリなどで享楽に耽った様を描いたかに見えるこの小説は、戦争に翻弄され傷ついた若者達の痛ましい姿を描いた物語でもある。

十九才で参戦しイタリア戦線で負傷したヘミングウェイの、あるいはロスト・ジェネレーションと呼ばれた仲間達の、心の虚無を描いた作品とも言えよう。若者たちはパリやスペインで酒だ女だ喧嘩だ闘牛だと享楽に耽るのであるが、それを誰が非難し得よう。戦争の惨禍が若者達に負わした傷はそれほどに深い。ヘミングウェイの出世作となり、「ロスト・ジェネレーション（失われた世代）」の流行語を生んだこの小説は、華やかな舞台と酒とバラの眩く世界の底にあるどうしようもない戦争の無残と虚無が読む者に迫る反戦の書でもある。そしてまた、実体験にもとづくこの小説はパリやスペインなどの実用的な観光案内としても面白く読めるのである。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

平井愛

29

「クスノキの女神」

東野圭吾

だけれども、もしかしたら起こりうる可能性がある脳の障害にどう向き合
っていけばいいのか考えさせられる一冊です。

この小説は、人の思いを預念、受念できる力のあるクスノキと、番人の
主人公と、脳に障害のある数々の登場人物やその家族の終焉を描くミステ
リー小説で、身近な大切な人とのなにげない日常が、いかに貴重であるか
を改めて感じた作品で、すこし泣きたい方におすすめです。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

池田武光

30

「人間臨終図巻」

山田風太郎

読後によくこんなに資料を集められたなと感心したが、考えたら彼は医大卒なのでなる程なと思い。人それぞれ死に臨んでの様子が有り、小生その時の心構えにしたいと思っています。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

齋藤ちひろ

31

「一瞬の風になれ」

佐藤多佳子

本が好きでよく読むのですが、読む本を選ぶ基準の一つに賞を受賞した本から選ぶというのがあります。この本は本屋大賞を受賞した本になります。数ある本の中から一冊を選ぶことは私にとってとても難しかったです。ページ数が多い小説にも関わらずもっと続きが読みたくなった本を選びました。三部作で完結になります。部活、少し恋愛も入る、青春物語になります。特に心に残る箇所が『努力したぶん、きっちり結果が出るわけじゃない。だけど、努力しなかったら、まったく結果は出ない。(略)チャレンジすることが、単純に尊い。(略)悔しさがエネルギーになる。パワーになる。そうやって、どんどんいい選手になれるんだよ。』

私は今部活をしているわけではありませんが、この言葉は私にとって何歳になっても向上心を忘れずに頑張ろうと思えてきます。また、子どもが部活などで挫折しそうになったときは、ぜひこの本を勧めたいと思っています。それくらい、こちらの本は皆様にもお薦めしたい一冊になります。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

竹口ふみ

32

「面白南極料理人」

西村淳

南極地域観測隊に調理担当のひとりとして越冬隊に加わった作者が、過酷な南極生活をユーモアたっぷりに描いた作品です。極寒という厳しい環境の中でも、毎日の食事がいかに大きな楽しみであり、隊員たちの心の支えになっているかがひしひしと伝わってきます。また、個性的な隊員たちとのやり取りも面白く思わず笑ってしまうシーンも多いです。一見すると特殊な環境の話ですが、人が集まって生活する中での喜びや苦労が身近に感じられ、読み終えた後には温かい気持ちになります。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

犬150%

33

「ゾウの時間ネズミの時間 サイズの生物学」 本川 達雄

1992年に刊行されたこの本に初めて目を通したのは、発売間もない頃に大学でのレポート課題としてで、その内容が実におもしろくあっという間に読破したのを覚えています。

普段の生活で時計はいたるところにあり時間が生活を支配しているので絶対的な基準であると受け入れているがそれは物理的時間であり、人間含めた動物には生理学的時間といった別の基準が存在する。それは生涯で心臓の脈動は生物種問わず20億回であるということ。天命を知る年齢となった今、イライラして心拍数をあげることなく、穏やかに生活していかなければなあと読み返してみようところがありました。

人間のエネルギー消費量と行動圏からみた特異性や、なぜ便利そうな車輪生物が存在しないのかなど興味深いテーマが盛りだくさんで、ベストセラー小説や歴史小説をよく選んでいた自分に新書ブームを作った本書が思いつきに出る一冊です。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

ハクレン

34

「赤毛のアン」

ルーシー・モード・モンゴメリ

私の人生において、こんなに心を震わされた物語はない。初めて読んだのは、確か20歳すぎの頃だったろうか。そのころの私はまだ主人公アン・シャーリーという少女の感性に寄り添い、プリンスエドワード島の美しい自然や、孤児として育ったアンがマッシュューとマリラ兄妹から深い愛情を受け、グリーンゲイブルズで成長していく姿にワクワクし、涙したものだった。そして20年時が経ち、旅先に夜のホテルでの時間潰しにと、「赤毛のアン」を持っていき再読した。すると私はアン側ではなく、完全にアンを引き取り育てる「マリラ」側の視点から再び心を震わせたのだ。長い年月が流れたのだと感じた。常に感謝の心を忘れず、日々を不器用にもひたむきに生き、そしてこよなく地元を愛するアン。「曲がり角の先に、何かあるかはわからない。でも、最高のものがあると信じているの」と、自分の選択に迷いのないアンの言葉は、今でもそしてこれからも私の信条です。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

えりか

35

「ふたごの兄がカホゴすぎる2」

遠山 彼方

ふたごの兄の言うことやこうどうがおもしろかったです。

とくにおもしろかったのは「じゃあお兄ちゃんがアイツをポッコボコにするカッコイイところまばたきしないでみとくんだよー」のところですよ。

だいとう70冊の交差点 ゝ私の大切な一冊

小林正光

36

「華麗なる一族」

山崎豊子

山崎豊子さんの作品が好きです。彼女は大阪市の船場出身、私も同じ街出身です。船場を舞台にした作品や沈まぬ太陽、白い巨塔なども好きですが、1作品を選ぶとすれば、この作品です。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

O・T

37

「告白」

湊かなえ

映画を観ました。松たか子の一人芝居の様な……。内容が強烈、そんな事があるんだ。えー、そないなる、そないする、そこまでする、なんと言
う展開やー。

そそくさと図書館へ行って買いました。原作を読みました。何、湊かな
えさん何、なんと言いうて良いか分からないミステリ。後で知った“イヤミ
ス”と言う言葉、もう虜です。次々買って全て読みました。

19才、今の奥さんに勧められて読んだ、司馬遼太郎さんの“竜馬
がゆく”から始まって、今日に至っています。図書館は私にとって無くて
はならない存在です。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

西野猛

38

「老子」

山室三良

田舟・田下駄、昔の大東の面影をたずねたら浮かび出る言葉である。土よりも水、というイメージがある。宝永元（1704）年の大和川付け替え普請以後も、水の氾濫はたびたびおきた。百姓は水で苦勞する。あり過ぎて困る。なければ、もっと困る。

人は一日たりとも水なしで生活することができない。朝の洗顔から夜寝るまで。否、夜中のトイレでも水のお世話になる。地球温暖化の昨今、「湯水のように使う」ことはできない。水は貴重である。老子は「上善若水」と、善なることを水にたとえた。何が善であるか、議論のあるところであるが、水の大切さは論をまたない。

この「老子」にある「自知者明」は、ソクラテスの「汝、自らを知れ」に通じる。この他にも、自分では気付かない珠玉の言葉を発掘する楽しみがある。私には漢文の素養がない。それでも、先学が老子の言葉をやさしく説き明かしてくれている。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

M i m a

39

「海に見える理髪店」

荻原浩

偶々ショッピングセンターの本屋で店員さんから「コレ面白いですよ」と勧められ一冊購入、中々面白く、図書館司書の友に「凄く面白いから職場に持って行ったら」と渡した、その後友から「メチャ面白いと言って次から次へと生徒が読んでずっと予約待ちよ」と聞き何となく嬉しくなりました、約10年前の出来事です。そんな話を老いた父に話しながら何気なく「今年は雑誌も含めてやけど約100冊読めたわ」と言ったところ「おっすごいじゃないか!」と思いがけず誉められた。父の思い出の中で誉められる経験は殆ど無かった私は有頂天になり、「よし来年は100冊本を読むぞ!」と意気込みました。自宅から徒歩10分圏内の図書館へ毎日のように通って新刊の棚の本を借り、新聞の書評や本の広告は必ず目を通して予約もしました。只々読破することと冊数を延ばす事を目的とするような読書だったし活字を追う事が続いていた。ある時手にした直木賞受賞作の『海に見える理髪店』。海辺の小さな理髪店に若者が訪れ老店主、

問わず語りに自らの人生を話し始める、人生に訪れる喪失と、ささやかな希望の光——心に染みる儚く愛おしい家族の小説集です。読了後表現し難い感動が湧き上がったのです。それは亡き父との思い出と重なり、褒めてくれた父の言葉と何故だが分からない幼い頃の海水浴のカルピスの味でした。『海に見える理髪店』との出会いから私の本の選び方が少し変化したことは画期的な出来事でした。勿論図書館の新刊の棚は毎日のように閲覧するし新聞の書評や広告に目を通す事も変わらないけれど冊数を活字を追いかける読書の姿勢は変わらないけれど、ほんの少し丁寧に著者の言わんとする文字からの香りを楽しめるようになって来たのは『海に見える理髪店』に出会ったからだと思います。今では読むスピードも速くなり本の内容の好みもジャンルも様々で有りながら、生きる指針を得たり、世の中の動きや若者の動向も垣間見られ、何より本からの感動が私の日常を輝かしていると思います。1年の読了目標は変わらず100冊以上をキープしています。近くに図書館があることの幸せに深く感謝しております。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

茉莉華

40

「ライ麦畑でつかまえて」

J・Dサリンジャー

私が大東市の中高一貫校に通っていた頃、ストレスばかりの生活で小説をたくさん読んでいました。その中で一番自分を変えてくれたのがこの本です。アメリカの名作と呼ばれ、永遠と全世界のティーンエージャーに影響を与える作品です。その魅力とは、主人公の原動力。学生時代は様々な悩みがありますが、この作品を読めば自分らしく生きられるでしょう。私の学生時代は自分に自信がなく、自分がどう見られているかと意識したときに周りの人より劣っている、弱い存在だと苦しみながら通学していました。そしてこの本は、主人公が私と同じような進学校の生徒で、自分だけが自由的な考えを持つので本の中で私と主人公はマイノリティだったので。主人公の思いと受け入れられない存在という境遇に共感しました。思春期にこのような本がなければ、葛藤して成長することもなかったでしょう。学生時代に世界的な名作を読んでみて自分のなりたい自分になりませんか？

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

ちあき

41

「ありがとうのいのち」

すとう ゆうこ

この絵本の印象として、やわらかな優しい風を感じました。絵はAーだと聞いていますが、親子の優しい表情に、とても癒されます。大切な命を宿し、赤ちゃんが産まれる。その時の気持ちを思い出しながら、たくさんの命が繋がれていくことを、この絵本から感じました。何度か出てくる「手」が印象的で、差し伸べる手、包み込む手、その手から優しさやいのちの重さ、そして罪悪感のような思いまで伝わってきます。私にとってこの絵本は、家族の命や自分の命も含め、”みんな大切な命なんだよ”と優しく教えてくれる、癒しの一冊です。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

神田

42

「流れ星が消えないうちに」

橋本 紡

恋愛小説かと思いきや、再生の物語でした。ふと手にした本でしたが、当時父を亡くした直後の私にとっては、心の支えとなる存在となりました。主人公が現実と向き合い、立ち直り、前に進めるようになることで私も救われました。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

K・M

43

「コーヒーが冷めないうちに」 川口俊和

現実を変えられないと知りながらも、過去のあの日へ戻る人々が紡ぐせつなくも温かい物語。有村架純主演で映画化もされており、海外でも高い評価を得ている小説です。とにかく切なくて、号泣しました。心に染み入る作品です。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

マキプ

44

「墮落論」

坂口安吾

白い社会に疑問を感じつつ、そこに反抗的な理由を黙考してみても、上辺で取り繕われた現実の世界では肯定されない。卑屈に堕ちようとしていた私の良き理解者となり、心を救ってくれたのが安吾でした。終戦直後に爆発的な反響を呼んだ「墮落論」。時代は違えども変わらぬ人間の本質をあらさまに記述してくれているのが嬉しい。人間は堕ちるもの。不幸があるから落ちるのではなく、人間だから堕ちるのだと彼は言う。命を生き、その先に死があり、そして様々考える人間だからこそ。人間が堕ちるものであるならば、堕ちることを恐れなくて良いように思えた。堕ちてみた先にも命があるならば、その命を生きれば良い。安吾は言う。「人間は墮落する。義士も聖女も墮落する。それを防ぐことはできないし、防ぐことによって人を救うことはできない」終戦後、環境も思想も一変して呆然とする日本人に生きる気力を与えたであろう安吾の言葉は、私のお守りでもあります。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

白山羊からの手紙

45

「はてしない物語」

ミヒヤエル・エンデ

けれども、これは別の物語…本編だけでも十分なボリュームのある話なのに、こちらの話に続きがあるなんて、気になる！（実際には書かれてはいきょうです。）

でも、物語って一つではないし、それこそ無限に広がっていくものだから、生まれ、あふれては散らばり、全宇宙にキラキラと存在するもの…自分も何かの物語の重要人物になる。

そんな物語の祖、素ともいえるのが「はてしない物語」なのだと思います。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

小辻 昌平

46

「厚物咲」

中山義秀

片意地。ケチ。周囲から嫌われる老人片野の人生と死と彼が育てた厚物咲の菊。人生にとって、大切なものは一体何だろうと考えさせられる作品。忘れられている小説であるが、今こそ読まれるべき一冊である。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

住子

47

「春いちばん」

玉岡かおる

私はキリスト教徒ではありませんが、“賀川豊彦”の名は知っていました。奥様のことが知りたくてこの本を大東市の巡回図書館より借りて読みました。賀川先生の世界連邦運動をはじめ、数々の組合運動に尽力されました偉大さや、奥様の貧しい人達のお世話をしながらの内助の功は凄いと思います。玉岡かおる作家の文章も読み易く、最後まで気が抜けませんでした。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

やまべ みき

48

「大地の子」

山崎豊子

「大地の子」は、日本人の戦争孤児が成長する過程を物語にしたものだ。主人公の陸一心（中国人の養父がつけてくれた名前）は、日本の開拓団として一家で満州（中国東北部）で生活していた。戦争に負け、帰国する際、父は徴兵されていなく、年老いた祖父や母らと帰国しようとする。しかし、祖父や母を亡くしたり殺されたりして、妹と二人残された。が、妹とは生き別れになってしまう。紆余曲折を経て引き取ってくれた中国人（陸徳志）は、大変温情ある人で、自らの命も顧みず育ててくれ、貧しい生活の中で教育を受けさせてくれたのだ。

一心は、その養親の気持ちを酌み成長する。ところが、文化大革命等、彼を取り巻く状況は、彼を否応なく弄ぶ。命の危機もあった。歴史の流れに翻弄されながら、それでも生きていく彼の姿は読む者の心を捉えて離さない。養父の徳志も、どれだけ彼のために力を尽くしたことか。もういいだろう、もうこれで最後にして欲しいと私自身何度も思った。そして、よ

うやく見つけた妹は、悲惨な環境の中で死んでいく。

そんな時に、彼自身の実の父と再会したのだ。陸一心は、日本名松本勝男であった。ところが、日中共同プロジェクトで互いに国を背負う重要な立場であることに、二人は苦悩する。一心を貶めようと企む人間もいる。父は、国の方針によって一心が立場を確立し得ない状況と父自身の思いで、一心・勝男を日本に連れて帰りたい。当然だと思う。養父である陸徳志は、一心が日本に帰ることを認めるが、本心ではないだろう。養母や妻は、受け入れられない。その思いも当然である。

最後、長江の船の中で一心・勝男は父に日本に帰る決断を求められた。私ならどうする？と自分自身に問いかけた。決して納得できる解答など無い。

「私は大地の子だ。」と叫ぶ陸一心・松本勝男。戦争が作ってしまった、それぞれの人々の苦悩。何故このような辛い生を負って生きなければならぬのか。それでも、直向きに生きる彼らを見てみると、私自身の思いや存在が余りにも弱く軽く思えるのだ。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

MIYOKO

49

「普天を我が手に」

奥田英明

たった七日間しかなかった昭和元年に生まれた4人の子供の誕生から晩年までを追った話。男児3人の親は軍人、エンターテイメント、任侠。そして当時アカと言われた社会運動に身を置く母を持つ“ノラ”と名付けられた女兒。親の生きざまを目の当たりにしながら戦争の中を必死に生きる4人の姿におもわず応援を送っていた。

そして終戦。いろんな矛盾を抱えながら自分のめざすものはひとつ。決してぶれない生き方に感銘した。さらに、やり方はそれぞれでも4人の行き付く所はひとつ。より良い日本、みなが暮らしやすい世の中を作る事、その為にはどうしたらいいか4人は模索し続ける。

この本を読んで、今日よりより良い明日を生きる為には何をなすべきか考えさせられた。子供や孫にも読んで欲しい一冊です。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

堀内悠真

50

「給食アンサンブル1」

如月かずさ

今年から中学生になる僕にとって、この本に出てくる悩みや学校の風景は、とても他人事とは思えませんでした。新しい環境で友達とうまくやっていけるか、周りからどう見られているか。そんな不安を抱える六人の登場人物たちの姿に、自分を重ねて読みました。

特に心に残ったのは、バラバラな悩みを持つみんなが、給食という同じ時間を共有することで少しずつ打ち解けていくところです。小学校の頃は何気なく食べていた給食が、実は言葉にできない不安を和らげたり、友達との距離を縮めたりする大切なきっかけになるんだと気づかされました。みんなで同じものを食べる時間は、心をつなぐ「アンサンブル」のような素敵な時間なんだと感じました。

これから始まる中学生活でも、きっと悩むことがあると思います。でも、この本のみんなのように、給食の時間をきっかけにして少しずつ自分の居場所を見つけていきたいです。明日の給食が、今からとても楽しみにまりました。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

nk

51

「いなくなれ群青」

河野裕

七草という少年が見知らぬ島で目を覚ます所から物語は始まる。島で事件が起こり、ミステリーのように見えて、理想を守る話だ。どれだけボロボロになっても理想を貫こうとする。大人になればなるほど、理想だなんて絵空事だ、きれい事だと流してしまう。簡単にあきらめてしまいそうになる。理想を守ろうとする尊さに、自分の考え方が変わった気がした。そんな一冊です。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

田中秀男

52

「深野水の由来」

中川良太郎 他

約2年程前と記憶しているが、東部図書館で地域の特集本のコーナーに自分の住んでいる「深野水の由来」という小冊子を見つけた。深野北は自分が生まれ85年も育ったルーツを知る著作である。大和川の付け替えが1704年に終わり、深野大池の干拓が始まり、約11年後に入植が終わり、兵庫県西宮、高槻、生駒他から開拓に來られた様子。

深野大池は南北2里、東西1里の広さで、深さ90cm～150cmあり、鮒、鯉、鯰、えび、うなぎ他多数生息していた様子。鴻池家から許可を得て、現在の道具もなく人力での開拓の苦労はいかばかりであったか、代々の祖先のご苦勞に対して畏敬の念を持たざるを得ない。

当時の十数件の集落が、現在は田んぼも残り少なく住宅が密集し、交通手段も便利になり、又スーパーも出来、生活が比べようもなく豊かになり、有難く感謝しかありません。ここに祖先のご苦勞に感謝を申し上げる次第です。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

p i n g a

53

「100万回生きたねこ」

佐野洋子

「100万回生きたねこ」は、自分が子供だった頃にも読んだことがある有名な絵本です。あらすじは知っていたと思います。ですが、親になり、図書館で何気なく本を手に取り、我が子に読み聞かせをした時、涙があふれました。

人生を全うするということはこういうことなんだろうなと思いました。そして、私も、いつか我が子たちを見て、「あいつらもりっぱなのらねこになったなあ」と満足して言えるようになることを目標にしました。4人の子供達のうち、3人は成人し、なかなか立派なノラネコになりました。末っ子はまだもう少し先ですが、そのセリフを言うためにこれからも日々頑張ろうと思っています。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

T・M

54

「ザリガニの鳴くところ」

デューリア・オーエンズ

「2019年アメリカで一番売れたミステリ」という宣伝にひかれて手に取った本。少女の成長記で、差別や環境問題を扱う社会派小説であり、アメリカ南部の自然や風土を描いた文学でもある本作品はおくゆきのある作品（訳者あとがきより）で、読破するのに時間が掛かりましたが、とても読み応えがあり、心に残る1冊となりました。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

けい

55

「オカマのプーさん」

下川裕治

『バンコクのオカマ、名前はプー』が放つ、生の解放感「バンコクのオカマ、名前はプー」。この副題に惹かれ、何か「いけないもの」に触れるような高揚感と共に本書を手にとった。当時、著者と同世代。社会の歯車として淡々と日々を消化していた私の心を激しく揺さぶったのは、タイの喧騒の中でプーさんが見せる、あまりに型破りな日常だった。計算も常識も通用しない、その日暮らしの危うさと輝き。プーさんが放つ「明日のことなんて知らない」と言わんばかりの奔放な振る舞いは、規律に縛られていた私の価値観を根底から覆した。コミカルな筆致で描かれる破天荒なエピソードの数々は、読み進めるうちに「正しく生きねばならない」という呪縛を、笑い飛ばしてくれるようだった。効率や正解を求められ、生きることに疲れ果てた現代の社会人にこそ、この「生きることのジュー」に触れてほしい。型に嵌まった毎日から心を解き放ち、深く息をさせてくれる一冊である。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

熊野和伸

56

「大誘拐」

天藤真

昭和54年日本推理作家協会賞受賞作。和歌山の山林王のおばあちゃんが誘拐された！身代金は100億円！奇想天外な展開を巧妙な語り口で描き、読者をぐいぐい引き込んでいく。今まで読んだ推理小説の中でも最も秀逸な一作。おばあちゃんと誘拐犯との軽妙な会話で「ほんまかいな」という珍妙な展開がまったく違和感なく引き込まれる。皆さんもぜひ一読を！

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

角山昭次

57

「菜根譚」

洪自誠

「菜根譚」という中国の本を聞いたことがあるでしょうか？ 中国と云えば論語は広く知られていますが、菜根譚については知名度は低いです。約16世紀ごろに中国で洪自誠が書いたものと言われており、人生訓のような話を中心であると言えましょう。色々な話がありますが、おそらく著者が言いたいことは「平凡で地味な人生であっても、心穏やかに毎日をすごせるのが一番である。」と私は考えます。平凡な毎日なんて退屈ではないかと思う方もいらっしゃるかも知れませんが、しかし日々の暮らしの中、ふとした幸福や心地よさを感じたことはあるのではないのでしょうか。その時間をじっくり味わうことで、豊かな日々をおくることができます。あらゆるエンターテインメントが増え刺激が多い現代の社会において、静かに自分の好きなことができれば幸せではないか、この考え方に多少なりとも共感することがあれば、そっとページをめくってみてはいかがでしょうか。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

まゆみ

58

「木曜日にはココアを」

青山美智子

今すぐ、マールブルカフェへ行きたくなりました。窓ぎわの席にすわってココアを飲んでみたいです。とてもホッとする空間なのでしょうね。いやな事件が多い現代です。この小説を読んでいると、全身の力がぬけていく感じです。あちこちで、さりげない言葉がかけられています。そんな的確なアドバイスができるのか不思議でした。

本当のやさしさは、本当のたくましさだ。

それは悲しい想いをしたね。等々。

青・緑・オレンジ・紫……。たくさんの色もちりばめられていて、ステキだと思いました。読み終わって、すぐ、また最初から読んでみたくなりました。私の大切な1冊です。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

H・M

59

「みおつくし料理帖」①～⑩

高田 郁

テレビをつければ争いや不安をあおるニュースばかり。人と人とのつながりが希薄に感じるこの頃ですが、この本を読めばもっと温かい世の中になる。そう感じさせるくらい、私が夢中になって読んだ「ほっ」とさせる物語です。

『みおつくし料理帖』は、時代小説の魅力と温かな人間ドラマが織り成すに残るシリーズです。江戸の町並みや人々の暮らし、食の文化が生き生きと描かれているので、物語の世界へ自然と引き込まれました。登場人物は個性豊かで、人情味あふれる描写で実在するかのような存在感です。特に主人公のひたむきさや周囲との絆は、本当に心が温まります。

作中、多くの伏線が張られていて、後に回収されていく展開で、一つの出来事が大きな流れへとつながります。終盤に向けて物語は勢いを増して、思わず一気に読んでしまいました。人の優しさや強さ、支え合うことの大切さを改めて感じさせてくれる感動作です。読んだ後には温もりが胸に広がる是非おすすしたい物語です。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

あんぱんばあば

60

「神様のカルテ」

夏川草介

“本には「正しい答え」が書いてあるわけではありません。人は一生のうちで一個の人生しか生きられない。本は別々の人生（困っている人・怒っている人・悲しんでいる人・喜んでいる人…の話）を体験できる。すると、そういう人々の気持ちが少しずつわかるようになる。わかるようになると優しい人間になれる。相手が何を考えているのかを考える力を「優しさ」というのです。優しさというのは想像力の事です。”

コロナの流行と同時期にガンが見つかり、緊急事態宣言発令。アルバイト先の保育園もしばらく休園。自粛と治療の日々に読んだ神様のカルテシリーズは、医療従事者と患者の物語。ガン患者の元教師と研修医の会話は、本好きな患者であり、保育士である私の心にしみるものがあった。そんな私も今年70才。優しい保育士をめざして今年もがんばります。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

ヒビモリ

61

「鬼平犯科帳シリーズ」

池波正太郎

若き日に出会い江戸の文化や庶民の生活に興味を持つようになった思い
出の作品。時代小説はいろいろ読んできましたが、小説を読みながら「こ
の料理食べてみたいなあ」と何度も思わせれたのは鬼平犯科帳のみ。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

masumoto

62

「こころ」

夏目漱石

私の人生に深く刻まれているのは、夏目漱石の『こころ』です。高校時代、普段は本を読み返す習慣などなかった私が、なぜか導かれるように何度も頁をめくった不思議な一冊です。初読時、自死の間際に「襖を少しあけた」Kの行動を、私は卑怯で汚い当てつけだと感じました。しかし二度、三度と読み返すうち、その解釈は「最期まで繋がっていたかったという愛ゆえの叫びではないか」と揺れ動き、一変したのです。思春期という多感な時期に、人間の心の深さ、浅ましさ、恋の盲目さ、そしてやり場のない孤独をこの本から教わりました。読後に残ったのは、爽快感とは対極にある、胸が締め付けられるような静かな寂しさです。人の心の複雑さと正体不明の熱量をこれほどまでに強く突きつけてきた本は、後にも先にもこれ以外にありません。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

西本兜真

63

「図書館戦争」

有川浩

私の紹介する本は、図書館戦争です。親に勧められたことがきっかけで読み始め、今では一番好きな小説となりました。舞台は、表現を取り締まる「メディア良化法」が存在する日本で、規制から本を守るために図書館は武装し、「図書隊」として検閲機関に対抗しています。このような設定に、最初は強い驚きを感じました。一見非現実的ですが、読み進めるうちにその世界観に引き込まれ、表現の自由の大切さについて考えさせられました。あまり小説を読んでこなかった私でも、人間関係の描写が細かくて面白く、特に上司・堂上と主人公・郁の關係にハマリ夢中で読むことができました。戦闘や任務におけるお互いの信頼や、郁のまっすぐな正義感、そして上官への恋心が印象に残っています。シリーズ作品なので長く楽しむことができ、ミリタリーやロマンスが好きな方には特におすすめです。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

橋本博行

64

「海を畏れる」

若林眞

本書の主人公は佐渡ヶ島で生まれ育ったが地域住民の閉鎖性に息苦しさ
を覚え東京の大学に進学、更にフランスに留学し現在は大学助教授の40
代の男性。兄の急逝により実家で喪主代理を務めるが土地の仕来りや慣習
に疎く、周囲からは役立たずと思われる。既に本土で墓地を購入し本
籍地の移転も決めていたが、都会暮らしでは一向に解放感は得られないと
いう筋立ての小説である。私も広い世界を見たいとの思いから東京の大学
に進学し、東京を本社とする外資系合併企業に就職した。大阪勤務は一度
もなく実家に帰るのは冠婚葬祭や正月等、年に数回に限られていた。学生
時代も含めると6つの都府県で暮らしたことになるが、実家以外では「所
詮仮住まい」の意識が抜けきらなかった。60歳で定年を迎えた時、母が
一人で暮らす実家に戻ると決めていたのは、母の強い要請もさることなが
ら、本書の影響が大きかったように思う。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

Stone

65

「流浪の月」

風良ゆう

年をとるにつれ読書しようとする焦点が合わなくなり本を読むのが面倒になっていました。そんな時になんとなく買った本屋大賞受賞作「流浪の月」。

雨の公園で主人公の家内更紗と大学生の佐伯文は出会います。二人の心とはうらはらに「誘拐犯」と「被害女児」というレッテルが貼られます。

「事実と真実」って似ているようでつくづく両立し得ないと考えさせられる。「優しさ」であっても、的外れな優しさは暴力ともなり得る。罪を犯し償い終えた人間をネットや社会は追い詰める正義という暴力。

自分の中で感じる違和感や、感じていなかった普通が言語化されてスーッと心の中にしみる読後でした。この本をきっかけに改めて読書って素敵だなあと感じ、これからも読書を楽しむ時間を作ろうと思いました。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

奏

66

「今夜、世界からこの恋が消えても」

一条岬

読むきっかけは映画でした。映画を見たのも、正直ヨルシカが主題歌だからという理由です。文学は好きでしたが、学生の甘酸っぱい恋愛小説は嫌いでした。まるで自分の勉強ばかりだった学生生活を否定されているような気がして。だから映画が公開されても見に行きませんでした。この前偶々サブスクでてきて、暇だから見た。それで、原作を読みたくなくなった。映画ではあまり語られなかった、「僕」の感情を知りたくなった。前向き健忘の彼女に幸せな、毎日を生きる光を与えるためだけに人生を捧げた「僕」の優しさ、愛が文面から感じ取られ、涙が止まらなかった。「僕」の見返りのない献身の先がどうか、彼女の行く長いこれからを照らしますように。読まなかった今までの自分を恨む作品でした。勉強や仕事で逃げただけなのに何を毛嫌いしていたんだろう。いつか私も本当の意味での献身ができる善良な人間になりたいと思いました。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

あさかやま

67

「やかまし村の子どもたち」

アストリッド・リンドグレーン

舞台はスウェーデンの農村、主に三軒並んだ家の四人の子ども達が登場する物語で、学校への行き帰り、夏休み、クリスマスなどの行事を通して村の暮らしや遊び、ときにはいたずらが活写されています。

また細いペンで細密に描かれた挿画も素敵です。

この本に出会った当時小学校四年生だった私の家庭は崩壊状態で、鬱屈を抱え自身の境遇を嘆く日々でした。それで物語に没入し、現実から逃避し辛さを忘れられたのです。

いつかこんな家族愛や近隣との友好に包まれ暮らしたいと夢見ておりました。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

近下昭夫

68

「すべては今のためにあったこと」

中山靖雄

この本は今までに61回読みました。現在は62回目を読んでいます。この本に出会ったのは、今から12年前。「へそ道」という講座でした。自分の本体は「みたま」であり、天からもらった役割を果たす生き方をしようというものでした。それから悩みが出てくるたびに読み返しました。いつしか毎日一章ずつ読んで感想を記すことを習慣にしました。まるでキリスト教の信者さんが聖書を読むように。

毎日読んでいても、何らかの新しい発見があります。誰かと話す時も、「頭で」理屈っぽく考えるのではなくて、心の底からころころと浮かんできたことを話すこと。目の前で起こることは全て受け入れることなど。目から鱗のように感じる発見があります。総じて言うと、「すべてに感謝し、常に喜び、絶えず祈る」生き方を教えてもらえます。自分の生き方に自信を持ってない方におすすめしたい本です。そして、毎日を喜びながら過ごしてほしいと願っています。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

M・H

69

「逆転美人」

藤崎 翔

ある女性に藤崎翔さんの逆転美人を紹介してもらいました。そこからすぐく私自身はまってしまいました。それから、藤崎翔さんの書いた本を見ると手に取って読むようになりました。

藤崎翔さんの逆転美人は、タイトルの通り、「あつ、こういう結末

か??」と後で読んでみて驚く展開になっています。後、「あなたに会えてこまった」（逆転どろぼう）なのですが、本当にあった実話らしくて、読みました。3冊目の「逆転ミワ子」は、私自身、残念ながら未だ読んでませんが、思い出の1冊だけの紹介が3冊になりましたが、逆転ミワ子もたぶん、私の期待にこたえてくれる事まちがいないと思います。

藤崎翔さんの作品は、かなり面白いので、ぜひみなさまもご興味を持っていただけたら、まず逆転美人から読んでいただけたら幸いです。

だいとう70冊の交差点

私の大切な一冊

KNT

70

「船乗りクプクの冒険」

北杜夫

子どものころ、家の本棚には横溝正史とか小松左京とかエラリー・クイーンの本が並んでいて、時間さえあれば分からないなりに読んでいたせいか、いつのまにか本を読むことが習慣になっていったように思います。そんな中でもひととき印象に残っているのが北杜夫の「船乗りクプクの冒険」。小説の主人公・少年「タロー」が、いつのまにか自分が読んでいる本の中に入ってしまった、「クプクプ」としてヘンテコな仲間たちと海を渡る大冒険をする、というもの。子どもながらに、ナンセンスでバカバカしい展開に大笑いをしながら読んでいました。そしてもう一つ覚えているのは、子どもの頃の私が読んでいたこの本を、母も同じように読んで楽しんでたということ。親子でバカバカしく大笑いをしていた記憶が残っています。大人になって本にかかわる仕事をするようになり、そういうささやかな体験が今の私につながっているのだな、とつくづく思うのです。